

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow



Aya Saotome

1981年東京都生まれ。美大を卒業後、友禅作家の生駒暉夫氏に入門。2013年に独立後、江戸小紋職人の五月女淳一さんと結婚し、長男をもうける。母として、友禅職人として多忙な日々を送っている。



東京手描友禅(とうきょうてがきゆうぜん)

模様染め一種で江戸中期、参勤交代で諸国の大名がお抱えの染師を江戸に連れて来たことから始まったといわれる。明治になり染料などの改良が進むと技法は大きく進歩し、京、加賀と並び三大友禅と呼ばれるまでになった。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版
パソコンやタブレットでもご覧になれます。本紙掲載以外に、多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉 検索

TV番組
ディスカバリーチャンネル(CS) 冠番組
「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!! 最新号のご案内 好評公開中

No.071 / 淡路人形浄瑠璃・人形遣い 吉田 千紅 氏

東京手描友禅職人

五月女 綾 氏

我が子への思いを込め、江戸の粋を染める。

着物や帯の代表的な模様染めに、三つの友禅がある。刺繍や金箔などを用い、華やかな色と模様を表す京友禅。重厚な色合いを背景に、写実的な模様をあしらう加賀友禅。そして、華美を抑えた色彩の中に絵のような模様を施す、東京手描友禅。

きっかけは？

五月女「幼いころから絵を描くのが大好きで、美大では日本画を学びました。東京手描友禅を初めて見た時、とても渋く垢抜けていて『こんな素敵な物が東京にあったのか』と思うくらい衝撃を受けたんです。その時、

この仕事をしようと決めました。もちろん一生続けていく覚悟で」

江戸情緒が残る下町、東駒形の工房で、五月女さんは帯づくりに取り組んでいた。模様は蝶。不老長寿の縁起物は、まだ小さなわが子の未来を思って選んだものという。

絵筆ではなく、糸のように細い糊を操り、羽根の線まで二つ二つ丹念に描く。つぎに分厚い糊で数匹の蝶を覆い隠した後、地色を染める。すると糊を置いた部分が白く残り、そこに模様を施す。

濃淡鮮やかな緑と黄で羽根を彩り、周囲を黒で引き締め、蝶を際立たせていく。作品に命を吹き込む、友禅挿しの工程だ。塗るではなく、挿すと呼ぶのは色を浸透させるべく、生地奥まで染料を挿し込むから。何度も筆に染料を付け直すとムラになるため、細かい部分にもたっぷり染料を含ませた太い筆で、色を挿す。染料が溢れそうになら

でも、線状に盛った糊が堰となり、他の色と混ざるのを防いでくれるのだ。さまざま工程を経て、ついに産後初となる帯を一カ月をかけ染め上げた。

今後の抱負は？

五月女「自分の作品に、まだ納得していない部分がたくさんあります。子育てのためというのは理由にならないので、職人としてやるからには、きっちりとした物をつくれるように頑張ります」

伝統の継承に、人生を捧げた若き職人。時に悩み、苦しみながらも、その目はしっかりと未来を見据える。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2014年5月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!!
子育てと伝統の継承の両立に全力で挑む姿を動画で紹介しています。ぜひご覧ください。